

&lt;論文&gt;

## 言語行動検出理論の検証 本音、嘘、皮肉、冗談を区別する認知過程

瀧澤 純

### 要約

本研究の目的は、本音、嘘、皮肉、冗談などの言語行動を区別する理論を検証することである。研究1では、先行研究の検討と類語調査によって、言語行動ラベル25項目を選定した。研究2では学生93名を対象に調査を行った。9種類の発話／話者評価それぞれに該当する言語行動について人数を集計し、クラスター分析によって言語行動を分類した。結果から、本研究で取り上げた言語行動は、発せられた言葉の字義、相手の声などから感じる違和感、気持ちを隠そうとしているか、気持ちを隠そうとしていないか、認識違いがあるか、相手が笑わそうとしているか、相手が自分を傷つけようとしているか、という聞き手の視点による7つの評価によって、概ね区別できた。言語行動の共通点と相違点を整理し、言語行動検出理論 (Verbal Behavior Detection Theory) を提案した。研究の独自性、適用可能性、社会的意義について議論した。

### 1. 問題と目的

同じ「ありがとう」という言葉でも、心から感謝していると感じられることもあれば、お世辞で感謝のふりをしていると感じられることもある。心からの言葉は「本音」などの名称でラベルづけでき、心からではない言葉は「嘘」「皮肉」「冗談」などの名称でラベルづけできる。人は、本音、嘘、皮肉、冗談などをどのように区別しているのだろうか。

心からの言葉に比べて、心からではない言葉の理解は困難であるとされている。子どもの発話理解に関する研究を概観した松井(2011)によると、心からの言葉である字義的発話が最も早く理解され、嘘は4歳以降、皮肉は6歳以降に理解できる。また、自閉症スペクトラム障害(ASD)児・者は嘘や皮肉の理解に困難を抱えているとされ、理解を支援する試みが行われている(例えば、Smith, 2001)。このように、子どもや特定の対象者において生じる困難を解消するためにも、心からではない言葉の理解の仕組みを解明することが求められている。

## 1.1 研究で使用する用語

本稿は、心からの言葉を本音表現 (sincere expression)、心からではない言葉を非本音表現 (insincere expression) と呼ぶ。また、それらの総称を言語表現 (verbal expression) とする。さらに、言語表現は特定の発話を指す用語として用いるが、発話だけでなく表情や状況を指す用語として言語行動 (verbal behavior) を用いる。当然ながら、これらの用語は音声的な意味での言葉に限らず、書き言葉や打ち言葉に対しても用いる。

なお、非本音表現 (insincere expression) には関連する用語として、非字義的表現 (unliteral expression)、語用論的表現 (pragmatic expression)、間接的発話 (indirect speech)、遠回し表現 (indirect expression)、言葉のあや (figure of speech)、文彩 (trope) などがある。本稿ではこれらの詳細な説明を省くが、本音を中心とする本音表現との対比を明確にするために、非本音表現という用語を用いる。

## 1.2 先行研究

言語学の一分野である語用論では、言語行動の中でも嘘や皮肉 (アイロニー) や比喩などが取り上げられてきた (例えば、Grice, 1989/1991; Sperber & Wilson, 1995)。しかし、多くの先行研究には、言語行動の区別という観点からすると問題があり、未解明の点が残されている。以後、問題について3点を指摘する。

第一に、同じ言葉でもラベルづけされる言語行動が変わりうるということが説明できない研究がある。たとえば Grice (1989/1991) は、A の秘密を X が商売敵に漏らした場面で、A が「X はいい友達だ」と B に伝える言葉を例示している。この例は Grice (1989/1991) いわく、事情を知っている B にとっては「A にとって X はいい友達ではない」ので、質の第一格率「偽だと思うことを言うてはならない。」に違反しており、皮肉として理解される。しかし、X が A の秘密を商売敵に漏らした場面だとしても、「X はいい友達だ」と心から思っていると理解できる場合もあれば、「X はいい友達だ」と嘘をついて取り繕っていると理解できる場合もある。Grice (1989/1991) は、人の会話には当を得た発言となるための、量、質、関係、様態という4種類の格率があるとしており、これら格率からの逸脱によって非本音表現などを説明している。しかし、格率からの逸脱では、異なる言語行動がどう「区別」されているかを説明できない。この問題点は、単一の理論から言語現象を説明するような、Sperber & Wilson (1995) においても同様に残されている (同様の指摘として、中村, 2002)。

第二に、複数の言語行動を扱った研究が少なく、複数の言語行動を扱っていても言語行動の区別に言及しない研究がある。たとえば、岡本 (2004) や内海 (1997) は、アイロニーのみを扱っている。発達心理学を中心に、嘘とアイロニーなど複数を扱った研究もみられるが (例えば、Okamoto, 2006; Siegal & Peterson, 1996; 竹内, 2014)、本音を除いて3種類以上の言

語行動を1つの研究で扱った例は少ない。例外として、伊藤ら(2001)では、嘘、罪のない嘘、比喩、ふり、冗談、皮肉を選択するような課題を使用しているが、言語行動の区別についての言及はない。同様に、春木(2006)はほめ言葉を例にして、賛辞(本音)、世辞、からかいを皮肉(嫌味)と比較しているものの、これらが「何らかの点で関連がある」と言及されているのみであり、言語行動の区別については明確になっていない。

これまでの2つの問題を含まない研究も存在する。しかし、第三の問題として、それらの研究は理論的提案に留まっており、言語行動の区別についてデータを用いた実証的な検討が行われていない。瀧澤(2019)は岡本(2010)を批判的に検討したうえで、聞き手による4つの認知「違和感の知覚」「誤認判断」「隠蔽判断」「笑い判断(非攻撃性)」を掛け合わせることで、本音、間違い、嘘表現、からかい、反語表現・アイロニーが区別できる可能性を提案している。このほか、瀧澤(2015)はいじりや陰口などの対人的な側面が強い行動を検討しているものの、皮肉や嘘などの非本音表現が検討できていない。

### 1.3 研究の目的

以上から、聞き手によるいくつかの認知を掛け合わせることで、言語行動が区別されている可能性がある。これらの点について実証的に検討するためには、「言葉に違和感があるか」などの判断を行うときの認知を扱う必要がある。すなわち、トランスクリプトによって発話や状況を例示する記述的アプローチでは、認知を十分に扱うことができない。よって、言葉の聞き手に思考や感性を尋ねる手法として、本研究は調査法を採用する。調査では、言語行動と、発話への評価や話者への評価とを対応付ける方法を用いる。

本研究の目的は、言語行動を区別する認知についての理論を検証することである。研究1は、先行研究と類語調査から言語行動の名称、すなわち言語行動ラベルの選定を行うことを目的とする。研究2は、研究1で選定した言語行動ラベルを用いて調査を行う。そして、言語行動の共通点と相違点を実証的に明らかにして、言語行動を区別する認知に関する理論を提案することを目的とする。

## 2. 研究1

### 2.1 方法

#### 2.1.1 先行研究からの収集

先行研究を検討することにより、言語行動ラベルを抜粋した。Grice(1989/1991)から「皮肉」「欺瞞」「比喩」、Sperber & Wilson(1995)から「アイロニー」「嘘」「比喩」、伊藤ら(2001)から「嘘」「比喩」「冗談」「皮肉」、春木(2006)から「皮肉」「本音(賛辞)」「世辞」

「からかい」、岡本（2010）から「皮肉」「冗談」「嘘」、瀧澤（2015）から「冗談」「嫌味」「いじり」「からかい」「陰口」「助言」「叱り」「不満」「愚痴」「悩み」、瀧澤（2019）から「嘘」「本音」「言葉のとおり」「言い間違い」「思い違い」「お世辞」「皮肉」「冗談」「嫌味」「欺瞞」「照れ隠し」「攻撃」を抜粋した。抜粋する際には、形容詞が付加された「優しい嘘」などの表現は、形容詞がない「嘘」などの単語になるようにした。単語の形式で抜粋した理由は、後に類語辞典を利用するためである。

先行研究で扱われているが本研究では除外した表現について述べる。「ふり（伊藤ら、2001）」は本研究で扱う嘘、皮肉、冗談のいずれとも解釈され、回答が困難になる可能性があることから除外した。「偽悪表現」は、岡本（2010）によれば、対立の意図がないのにわざと対立を表明して、相手との親しさを表明するなどの例が挙げられている。ただし偽悪表現という言葉は親和性が低く、説明なしで調査に使用することが困難であると判断し、除外した。また、偽悪表現に代わる単語を検討したものの、同等の表現はなかった。そのため、偽悪表現の一部に含まれる表現として「特定の人物に対して、表面的には冷たかったりそっけなかったりする態度だが、本心では好意があること」として理解されることが多い（瀧澤・渡辺、2012）、「ツンデレ」を採用した。また、言葉の親和性の観点から、Grice（1989/1991）や Sperber & Wilson（1995）における「隠喩」「換喩」「提喩」を全て「比喩」とした。このほか、瀧澤（2015）における「我慢」「無視」「独り言」は、聞き手に伝わるということがないまたは少ないコミュニケーション形式であり、聞き手が言葉や行動を受け取るという本研究の場面に適用できないため、除外した。

### 2.1.2 類語辞典からの収集、言語行動ラベルの追加

先行研究から収集した言語行動ラベルの類語を整理した。本研究では、書籍の類語辞典として「使い方の分かる類語例解辞典（新装版）（遠藤，2003）」「三省堂類語新辞典（中村ら，2005）」「日本語シソーラス—類語検索辞典—（第2版）（山口，2016）」の3点を用いた。さらに、WEB辞典として「Weblio 類語辞典（GRASグループ株式会社，2024）」の1点を用いた。

## 2.2 結果

先行研究から収集した言語行動ラベルそれぞれについて、類語を整理した結果を Table 1 に示す。Table 1 では辞典の掲載順に類語を3個抜粋している。ただし、言語行動ラベルの選定の際には、類語辞典に掲載されている内容すべてを元にして、著者と研究協力者2名との合議によって検討を行った。「言葉のとおり」の類語はなかった。

先行研究から収集した言語行動ラベルの類語を利用して、追加すべき言語行動ラベルを検討した。その結果、「アイロニー」の類語から「反語」を、「陰口」の類語から「悪口」を採用し

Table 1 言語行動ラベルそれぞれの類語

言語行動ラベル	使い方のわかる類語例解辞典 (新装版) (遠藤, 2003)	三省堂類語新辞典 (中村ら, 2005)	日本語ソーラス類語検索辞典 (第2版) (山口, 2016)	Weblio類語辞典 (GRASグループ株式会社, 2024)
嘘	虚言 捏造 偽言	嘘っ八 嘘八百 法螺	偽り、許 (いつわり)、欺 (いつわり)	うそ 虚言 妄語
皮肉	アイロニカル アイロニック イロニー	婉曲語法 婉曲 仄めかす	シニカル、皮肉る、渋口	嫌み イロニー 嫌味
アイロニー	イロニー 皮肉な結果 皮肉	皮肉 反語 婉曲語法	諷意、諷言、諷刺	嫌み イロニー 嫌味
冗談	道化 ジョーク 戯言	怪談 情話 コント	笑い話、戯言、漫談	戯れ ふざけ 道化
比喩	言葉のあや 譬喩 言葉の綾	譬える 譬え 直喩	譬え、譬え種、譬え言	言葉のあや 譬喩 言葉の綾
お世辞	御世辞 菌剥 外交辞令	巧言 甘言 殺し文句	甘言、上手、おべっか	御世辞 菌剥 外交辞令
欺瞞	なし	欺く 騙る 騙す	欺く、欺騙、欺網	虚偽 不正 化かす
照れ隠し	なし	照れる 照れ臭い 面映い	カムフラージュ、恥じる、気恥ずかしい	なし
ツンデレ	なし	なし	なし	勝ち気な女 性格のキツ目の女性
言い間違い	なし	なし	言い誤り、言誤り、言い過つ	言い誤り 言い間違い 言い違い
思い違い	読み間違え 読損なう 取りちがえる	誤り 誤謬 間違い	誤解、誤認、考え違い	心得ちがい 取違え 誤認識
本音	善心 良心 本心	本意 真意 本心	真心、ちゅう懐、ちゅう心	考え 腹づもり 魂胆
嫌味	なし	嫌 嫌がる 嫌気がさす	不快、嫌らしい、嫌みたっぷり	イロニー 嫌味 厭味
攻撃	攻 アタック 攻め	矛先を向ける 追っ手を差し向ける	批難、指弾、駁撃	攻 攻戦 襲撃
いじり	なし	なし	弄う、かいまさぐる、いじくりまわす	猪尻 弄り 井尻
からかい	なし	巫山戯る 混ぜ返す 洒落のめす	冷かす、茶化す、茶にする	鬻 揶揄 鬻り
陰口	悪口/悪態/誹謗	悪口 悪たれ口 憎まれ口	陰言、陰謗り、隠れ言	当てつけ 意地悪 嫌がらせ
助言	忠告 奨める 勧める	アドバイス コンサルティング カウンセリング	忠告、忠言、アドバイス	奨め 勧告 勧め
叱り	怒りつける 叱りつける 叱り付ける	叱り付ける 叱り飛ばす 剣突を食わす	譴責する、叱責、譴怒	叱り お叱り 咎め
不満	不賛成 異存 不同意	不平 不満足 不足	不服、不平、惜しい	不賛成 異存 不同意
愚痴	なし	愚痴る 零す 託つ	愚痴言、愚痴話、愚痴を零す	他愛なさ 馬鹿さ 愚鈍
悩み	問い 課題 問	悩む 思い悩む 悩ましい	苦悩、悩乱、悩ましい	苦しみ 苦痛 水火

た (Table 1, 下線部)。

### 2.3 研究2で用いる言語行動

研究1では、先行研究と類語調査から言語行動ラベルの選定を行うことを目的として行った。これまでの結果から、研究2で用いる言語行動ラベルを決定した。そして、回答者の負担を減らすために、著者が想定した類似度の順に並べ替えを行った。以上から、「嘘」「お世辞」「欺瞞」「からかい」「冗談」「照れ隠し」「ツンデレ」「比喩」「言い間違い」「思い違い」「本音」「言葉のとおり」「皮肉」「嫌味」「攻撃」「アイロニー」「反語」「いじり」「悪口」「陰

口」「助言」「叱り」「不満」「愚痴」「悩み」の25個を、研究2で用いる言語行動ラベルとして決定した。

### 3. 研究2

#### 3.1 方法

##### 3.1.1 調査対象者

東北地方の大学で心理学系科目を受講する大学生93名であった。調査対象者はすべて女性であった。年齢は調査で尋ねなかったため、不明である。

##### 3.1.2 調査

発話／話者評価（例：「A. 相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればポジティブである」）にあてはまる言語行動を、すべて選択するように求めた。言語行動には、研究1で選定した言語行動ラベル25項目を用いた。質問の文言は、「以下の言葉・行動それぞれをあなたが聞く側・される側であることを想像してください。そのとき、『相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればポジティブである』という特徴におおむねあてはまる言葉・行動は、以下のうちどれですか。あてはまる言葉・行動すべてにチェックをしてください。」とした。

発話／話者評価は瀧澤（2019）を参考に作成を行い、「A. 相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればポジティブである（字義ポジ）」「B. 相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればネガティブである（字義ネガ）」「C. 相手の声、表情、動きのうち、いずれか一つ以上に違和感がある（違和感）」「D. 相手の認識が間違っている（認識違い）」「E. 相手の認識は間違っていないが行動が間違っている（行動違い）」「F. 相手が気持ちを隠そうとしている（隠そう）」「G. 相手が気持ちを隠そうとしていない（隠さず）」「H. 相手が自分を傷つけようとしている（傷つけ）」「I. 相手が自分を笑わせようとしている（笑わせ）」の9種類とした。（）内に記入したものは略称である。

##### 3.1.3 手続き

調査の目的について説明し、調査に関する問い合わせ先などを伝え、研究への参加を依頼した。研究では参加／不参加／途中不参加／無回答を参加者の自由とし、研究参加／不参加による不利益がないことを伝えたくて実施した。これらの保障として、無記名での回答を求めた。このほか、研究データは研究者が電子データとしてパスワード付きの状態でも管理すること、研究成果を公開する際には個人を取り上げて公開しないことを説明した。以上をふまえて、参加に同意する場合にのみ、Google forms上で回答するように求めた。

### 3.2 結果

#### 3.2.1 発話／話者評価の該当性

調査対象者 93 名全員を分析対象とした。発話／話者評価に該当するとした人数を、言語行動ごとに集計し、発話／話者評価 9 種類×言語行動 25 項目となるクロス集計表を作成した。発話／話者評価への該当者数を、言語行動のそれぞれについて Table 2 に示す。

#### 3.2.2 言語行動の分類

言語行動の計 25 項目を分類することを目的として、作成したクロス集計表を用いてウォード法によるクラスター分析を行った。クラスター分析には College Analysis Ver.9.0 を使用した。個体間の距離として平方標準化ユークリッド距離を用いて、欠損値除去を自動、Yates 補正をあり、同順位補正をありに設定した。解釈可能性を考慮して、本稿ではクラスターを 10 個に決定した場合と、6 個に決定した場合を報告する (Table 2)。

Table 2 言語行動による発話／話者評価への該当者数と所属クラスター

言語行動	発話／話者評価									所属クラスター	
	A 字義ポジ	B 字義ネガ	C 違和感	D 認識違い	E 行動違い	F 隠そう	G 隠さず	H 傷つけ	I 笑わせ	10分類	6分類
1.嘘	29	46	<u>69</u>	16	23	<u>71</u>	0	21	16	①	①
2.お世辞	<u>55</u>	28	<u>51</u>	19	16	<u>59</u>	4	6	22	②	①
6.照れ隠し	<u>51</u>	12	36	6	12	<u>73</u>	5	1	12	②	①
7.ツンデレ	41	19	33	7	20	<u>65</u>	3	1	7	②	①
3.欺瞞	6	<u>55</u>	29	10	16	23	3	23	0	③	②
16.アイロニー	3	39	23	6	12	13	10	26	0	③	②
17.反語	5	28	18	8	5	11	7	14	0	③	②
25.悩み	10	39	20	6	1	6	31	7	2	③	②
22.叱り	7	<u>61</u>	21	9	12	2	35	28	1	④	②
23.不満	3	<u>76</u>	23	23	15	6	37	26	1	④	②
24.愚痴	2	<u>75</u>	25	19	18	11	45	28	2	④	②
9.言い間違い	15	24	21	46	24	6	11	1	6	⑤	③
10.思い違い	12	25	30	<u>63</u>	16	5	9	1	1	⑤	③
4.からかい	18	<u>61</u>	32	13	30	15	13	31	<u>60</u>	⑥	④
18.いじり	5	<u>65</u>	30	18	30	15	16	<u>49</u>	<u>29</u>	⑥	④
5.冗談	36	20	22	10	13	34	8	8	<u>82</u>	⑦	④
8.比喩	34	10	2	5	3	13	8	0	9	⑧	⑤
21.助言	<u>56</u>	8	7	8	1	1	20	4	1	⑧	⑤
11.本音	45	10	5	6	4	2	<u>85</u>	1	4	⑨	⑤
12.言葉のとおり	34	14	1	5	5	0	<u>63</u>	3	4	⑨	⑤
13.皮肉	9	<u>77</u>	<u>55</u>	15	32	32	20	<u>79</u>	0	⑩	⑥
14.嫌味	6	<u>85</u>	<u>52</u>	16	36	26	24	<u>85</u>	0	⑩	⑥
15.攻撃	1	<u>79</u>	29	19	34	9	35	<u>83</u>	2	⑩	⑥
19.悪口	1	<u>89</u>	38	20	35	9	38	<u>85</u>	2	⑩	⑥
20.陰口	0	<u>85</u>	41	19	32	21	26	<u>79</u>	1	⑩	⑥

### 3.2.3 言語行動の共通性と相違性

調査対象者の過半数である 47 名以上であった箇所に着目する (Table 2, 下線部)。嘘、お世辞、照れ隠し、ツンデレは、「相手 (話者) が気持ちを隠そうとしている」ものとして共通していた。ただし、嘘とお世辞は「相手の声、表情、動きのうち、いずれか一つ以上に違和感がある」ものであり、さらに、お世辞と照れ隠しは「相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればポジティブである」とみなされていた。欺瞞、アイロニー、反語、悩み、叱り、不満、愚痴は、「相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればネガティブである」に該当する点で共通していた。ただし、その程度が強いのは叱り、不満、愚痴であった。言い間違いや思い違いは、「相手の認識が間違っている」ものとして共通していた。からかい、いじりは「相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればネガティブである」に該当する点で共通していた。さらに、からかいは「相手が自分を笑わそうとしている」傾向が高く、いじりは「相手が自分を傷つけようとしている」という傾向が高かった。冗談は「相手が自分を笑わそうとしている」ことに特徴があるとされていた。比喩と助言は「相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればポジティブである」ものとして共通点があった。本音と言葉のとおりは、「相手が気持ちを隠そうとしていない」ことで共通点していた。皮肉、嫌味、攻撃、悪口、陰口は、「相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればネガティブである」、かつ、「相手が自分を傷つけようとしている」ものとして共通していた。ただし、皮肉と嫌味は「相手の声、表情、動きのうち、いずれか一つ以上に違和感がある」傾向が高かった。

### 3.2.4 発話／話者評価による言語行動の区別

以上の結果から、言語行動を区別する認知に関する理論を提案する。Table 2 より、「A. 相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればポジティブである (字義ポジ)」から「B. 相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればネガティブである (字義ネガ)」を減算し、字義のポジティブ度を計算した。93 名の 25% である 23 名を区切りとして、字義のポジティブ度が -93 から -23 までを「ネガティブ (ネガ)」、-22 から 22 までを「中間または両方 (中立)」、23 から 93 までを「ポジティブ (ポジ)」とした。その他の発話／話者評価については、調査対象者の過半数である 47 名未満であれば「少」、47 名以上であれば「多」とした。

以上から、言語行動を区別する認知に関する理論を「言語行動検出理論 (Verbal Behavior Detection Theory)」として、Table 3 に示す。10 分類のクラスターに従って (Table 2)、言語行動を分類した。ただし、同じ分類の中でも特徴が異なる言語行動は、異なる分類として示した。本研究で取り上げた言語行動は、発せられた言葉の字義、相手の声などから感じる違和感、気持ちを隠そうとしているか、気持ちを隠そうとしていないか、認識違いがあるか、相手が笑わそうとしているか、相手が自分を傷つけようとしているか、という聞き手の視点による



Table 3 言語行動検出理論：発話／話者評価による言語行動の区別

言語行動	発話／話者評価						
	A-B 字義	C 違和感	F 隠そう	G 隠さず	D 認識違い	I 笑わせ	H 傷つけ
嘘	中立	多	多	少	少	少	少
お世辞	ポジ	多	多	少	少	少	少
照れ隠し	ポジ	少	多	少	少	少	少
ツンデレ	中立	少	多	少	少	少	少
欺瞞、アイロニー、反語、悩み	ネガ	少	少	少	少	少	少
叱り、不満、愚痴	ネガ	少	少	少	少	少	少
言い間違い	中立	少	少	少	少	少	少
思い違い	中立	少	少	少	多	少	少
からかい	ネガ	少	少	少	少	多	少
いじり	ネガ	少	少	少	少	多	多
冗談	中立	少	少	少	少	多	少
比喩、助言	ポジ	少	少	少	少	少	少
本音、言葉のとおり	ポジ	少	少	多	少	少	少
皮肉、嫌味	ネガ	多	少	少	少	少	多
攻撃、悪口、陰口	ネガ	少	少	少	少	少	多

7つの評価によって概ね区別できた。ただし、行動が間違っているかの評価は区別に寄与しなかった。注意すべき点として、「欺瞞、アイロニー、反語、悩み」と「叱り、不満、愚痴」は異なるクラスターであったため別の行に表記したが、Table 3では同一の特徴となっている。

### 3.3 考察

研究2は言語行動の共通点と相違点を実証的に示し、言語行動を区別する認知に関する理論を提案することを目的として行った。本研究で扱った発話／話者評価は、「行動違い」を除いて、言語行動の区別に寄与していた。また、「相手の言葉の文字的な意味だけをとらえればポジティブである」のような発話についての評価だけでなく、「相手が気持ちを隠そうとしている／いない」のような話者の意図についての評価も区別に影響していた。言語行動を区別するために、発話と話者の意図の双方が重要になるといえる。

本研究で提案した理論を用いると、言語行動の差異を理解することができる。たとえば、嘘とお世辞は類似性があるが、嘘は字義が中間またはポジティブとネガティブの両方であり、お世辞は字義がポジティブであるという違いがあると考えられる。さらに、言語行動それぞれを定義することができる。たとえば、本音は「字義がポジティブで、話し手が気持ちを隠そうとしないもの」、嘘は「字義が中間またはポジティブとネガティブの両方で、話し手の声、表情、

動きのうち、いずれか一つ以上に違和感があり、話し手が気持ちを隠そうとするもの」、皮肉や嫌味は「字義がネガティブで、話し手の声、表情、動きのうち、いずれか一つ以上に違和感があり、話し手が聞き手を傷つけようとするもの」、冗談は「字義が中間またはポジティブとネガティブの両方で、話し手が聞き手を笑わせようとするもの」と定義づけられる。

本研究の言語行動検出理論を瀧澤（2019）の修辞判断モデルと比較して、異なっている4つの点を取り上げる。第一に、言語行動検出理論は扱う言語行動の幅が広く、本音や嘘などの言語的な表現だけでなく、陰口などの対人行動も含めている。第二に、字義がポジティブとネガティブな場合に加えて、中間または両方である場合を想定している。第三に、話者評価に「傷つけ」が加わっている。最後に、照れ隠し、冗談、攻撃に関して、瀧澤（2019）では違和感が知覚されるものといわれているが、本研究からはこれらに関する違和感は多くないことが予想される。これらの点で異なっているものの、本研究と瀧澤（2019）は、発話／話者評価の方向性において概ね一致している。

このほかに重要な点として、発話／話者評価の順序については検討の余地が残る。本研究では左から順に、字義、違和感、隠そう、隠さず、認識違い、笑わせ、傷つけ、と並べた。字義の理解が先行してその後に含意などの解釈が起こるという考えは他の研究でもみられる（例えば、Grice, 1989/1991）。しかし、そのような順だけでなく、音声や表情から知覚される違和感が字義の理解に先行する認知が働いている可能性もある（Watanabe et al., 2014; 2019）。いずれにしても、評価についての順序は、本研究のように詳細なレベルで明かになっていない。順序に関する疑問を明らかにするために、調査的アプローチではなく、実験的なアプローチや神経科学的アプローチが必要になるだろう。

#### 4. 総合的考察

本稿は2つの研究から、言語行動の共通点と相違点を実証的に明らかにした。そして、言語行動を区別する認知についての理論を提案した。この理論の名称を言語行動検出理論（Verbal Behavior Detection Theory）とする。

本研究の独自性のひとつは、複数の言語行動を統合的に捉え、共通性と相違性を量的に示したことである。話者の意図を推測するなどの心理的で感性的な評価を扱うためには、何らかの手法で人に回答を求める必要がある。しかし、人に回答を求める手法では項目数などに限界があり、扱う言語行動の数に制限が生じる。そのため、言語行動を統合的に捉えることと、共通性や相違性を量的に示すことがトレードオフの関係になり、両立は困難である。従来多くの研究が、嘘、皮肉、冗談などいずれかを研究の対象としてきたのも、このような困難さが原因であるのかもしれない。本研究は、そのような方法論的問題に対して先見となる例を示し

た。この点を成果として強調したい。

研究2で行った調査では、「嘘」などに解釈されうる発話や状況の具体例は提示しなかった。そのため、調査対象者は「嘘」などの言語行動ラベルからイメージを想像し、自身の記憶を想起し、回答を行ったと思われる。それらのイメージや記憶には調査対象者によるバイアスがあったと思われる。しかし、そのようなバイアスを含みながらも、言語行動それぞれの共通点と相違点は明かになった。本研究のように発話や状況の具体例を提示しないアプローチでも、言語行動の解明に資するものになりうる。

本研究の限界について、3点を述べる。第一の限界は、本研究では言語行動の区別における個人差を扱わなかった点にある。研究2で明らかになった言語行動の特徴は多くの人に共通するものであると推察されるが、全員に共通するものではない。言語行動ラベルが示す言語行動の意味や区別の基準は個人による差異がある可能性があるうえ、そのような個人による差異が言語能力などのパーソナリティから説明できる可能性もある。これらの点については、後の研究に譲りたい。

第二の限界として、研究で使用する用語や文言についてもさらなる検討が必要である。言語行動ラベルは研究1で収集、整理したものであるが、用語や文言の適切性は保障されていない。本来、言語行動のラベルとなるものは要求、依頼、命令など、無数にある。本研究は非本音表現を中心に扱ったが、より広い言語行動を扱う研究を行うこともできるであろう。また本研究は、発話／話者評価についても先行研究を参考に文言を作成しており、どの程度適切なものであったのかがわからない。たとえば、「相手が気持ちを隠そうと」という文言を「相手が気持ちを隠蔽しよう」と変更するだけで、回答者の判断が影響を受けることが予想される。また、日本以外で研究を行う場合、日本語での言語行動ラベルすべてを外国語と対応づけることは難しく、回答においても文化による影響を受けることが予想される。いずれにしても、語彙や発話理解に関する能力などの外的な基準を用いて、言語行動ラベルや発話／話者評価の文言の適切性を評価する研究が、後に必要になるであろう。

第三の限界として、本研究で提案した理論では分類できない言語行動が残されている。例として、「比喩、助言」は同一の分類としたが、辞書的な意味としても人の認識としても区別が可能なものであろう。また、今回は単一の言語ラベルとして扱っている「皮肉」なども、さまざまな下位分類があることが知られている。たとえば岡本（2010）では、皮肉（真意伝達型）と皮肉（かつぎ型）が挙げられている。これらの区別を行うためには、本研究で使用した以外の言語行動ラベルや、発話／話者評価を追加する必要がある。そして究極的には、言語行動も発話／話者評価も膨大な数になり、単一の研究で扱うことができる範囲を超えることが予想される。よって、本研究では分類ができていない言語行動や下位分類が膨大にあるが、それらを検討する別の研究を待ちたい。

最後に、本研究の社会的意義について述べる。本研究のように言語行動を統合的に捉えたアプローチが盛んになれば、従来の言語行動研究を統合する役目を担うことができる。また、外国語教育や日本語教育などの言語教育への応用もありうる。例えば、外国語学習者における嫌味などの理解や産出においては、「他者の気持ちを読み取ればいい」というような曖昧なものではなく、「攻撃的かどうかを読み取ればいい」というように、読み取るべき内容を明確にできる。このほか、心理・発達・福祉における臨床的支援への応用もありうる。これまでの研究で、自閉症スペクトラム障害（ASD）児・者（Smith, 2001）、統合失調症患者（Langdon et al., 2002）、前頭側頭型認知症患者は（Shany-Ur et al., 2012）、嘘や嫌味の理解に関する課題の達成度が低いとされている。本研究から、障害や疾患をもつ対象者は発話評価や話者評価のいずれかに困難を抱えている可能性を想定できる。すなわち、支援者は支援すべき認知をより明確に決定できるようになるであろう。

## 付記

本稿は、第48回社会言語科学会大会での発表原稿に加筆修正を行ったものである。特に重要な変更として、研究1を加え、研究2の再分析を行って理論の内容を変更し、それらの変更に基づいて問題と目的および総合的考察に加筆・修正を行った。本稿に掲載した研究は、宮城学院女子大学2023年度学内研究費（研究助成（B））による支援を受けて行った。

## 引用文献

- 遠藤織枝（編著）（2003）. 使い方の分かる類語例解辞典（新装版） 小学館  
GRAS グループ株式会社（2024）. Weblio 類語辞典 <https://thesaurus.weblio.jp/>（最終閲覧日：2024年3月18日）  
Grice, P. (1989/1991). *Studies in the way of words*. Cambridge: Harvard University Press. (グライス, P. (著), 清塚邦彦 (訳) (1998). 論理と会話 勁草書房)  
春木茂宏 (2006). アイロニーの記述的研究 (3) —— 賛辞、世辞、からかいとの比較 —— 文学・芸術・文化：近畿大学文学部論集, 18, 39-69.  
伊藤斉子・高原朗子・土田玲子・李家正剛・川村伶子・津田剛・瀧上英一・川崎千里 (2001). 紙芝居形式による「心の理論」高次テスト作成に関する予備的研究 —— 健全青年の反応特性 —— 長崎大学医療技術短期大学部紀要, 14, 69-76.  
Langdon, R., Davies, M., Coltheart, M. (2002). Understanding Minds and Understanding Communicated Meanings in Schizophrenia. *Mind & Language*, 17, 68-104. <https://doi.org/10.1111/1468-0017.00190>  
松井智子 (2011). 子どもの「ミス・コミュニケーション」と心の理論の発達 岡本 真一郎 (編) ミス・コミュニケーション——なぜ生ずるか どう防ぐか—— ナカニシヤ出版, 41-64.  
中村明・芳賀綏・森田良行 (編) (2005). 三省堂類語新辞典 三省堂  
中村芳久 (2002). 認知言語学からみた関連性理論の問題点 語用論研究, 4, 85-102.  
岡本真一郎 (2004). アイロニーの実験的研究の展望 —— 理論修正の試みを含めて —— 心理学評論, 47, 395-420.  
Okamoto, S. (2006). Perception of hiniku and oseji: How hyperbole and orthographically-deviant styles

- influence irony-related perceptions in the Japanese language. *Discourse Processes*, 41, 25-50. [https://doi.org/10.1207/s15326950dp4101\\_3](https://doi.org/10.1207/s15326950dp4101_3)
- 岡本真一郎 (2010). ことばの社会心理学 第4版 ナカニシヤ出版, 148-149.
- Shany-Ur, T., Poorzand, P., Grossman, S., Growdon, M., Jang, J., Ketelle, R., Miller, B. L., & Rankin, K. P. (2012). Comprehension of insincere communication in neurodegenerative disease: Lies, sarcasm, and theory of mind. *Cortex*, 48, 1329-1341. <https://doi.org/10.1016/j.cortex.2011.08.003>
- Siegal, M., & Peterson, C. C. (1996). Breaking the mold: A fresh look at children's understanding of questions about lies and mistakes. *Developmental Psychology*, 32, 322-334. <https://doi.org/10.1037/0012-1649.32.2.322>
- Smith, T. (2001). Discrete trial training in the treatment of autism. *Focus on Autism and Other Developmental Disabilities*, 16, 86-92. <https://doi.org/10.1177/108835760101600204>
- Sperber, D. & Wilson, D. (1995). *Relevance: Communication and cognition. 2nd Edition*. Malden: Blackwell Pub. (内田聖二・宋南先・中達俊明・田中圭子 (訳) (1999). 関連性理論——伝達と認知—— (第2版) 研究者出版)
- 竹内道子 (2014). うそと皮肉はどう違うか——ことばの使用からこころをみる—— 人文学研究所報, 52, 1-17.
- 瀧澤純 (2015). 他者の欠点に気付いたときの行動選択——いじりか、助言か、陰口か、愚痴か、我慢か—— 総合研究 (ノースアジア大学総合研究センター紀要), 3, 187-196.
- 瀧澤純 (2019). 修辞判断の認知プロセス——本音、アイロニー、皮肉、嫌味、優しい嘘、欺瞞、間違い、冗談、からかい、照れ隠し—— 総合研究 (ノースアジア大学総合研究センター紀要), 7, 223-230.
- 瀧澤純・渡辺未由希 (2012). 他者が理解している新語の意味の推測——「ツンデレ」における自己中心性バイアスの検討—— 首都大学東京・東京都立大学心理学研究, 22, 1-8.
- 内海彰 (1997). アイロニーとは何か? ——アイロニーの暗黙的提示理論—— 認知科学, 4, 99-112.
- 山口翼 (編) (2016). 日本語ソーラス——類語検索辞典—— (第2版) 大修館書店
- Watanabe, T., Yahata, N., Kawakubo, Y., Inoue, H., Takano, Y., Iwashiro, N., Natsubori, T., Takao, H., Sasaki, H., Gono, W., Murakami, M., Katsura, M., Kunimatsu, A., Abe, O., Kasai, K., & Yamasue, H. (2014). Network structure underlying resolution of conflicting non-verbal and verbal social information. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, 9, 767-775. <https://doi.org/10.1093/scan/nst046>
- Watanabe, T., Lawson, R. P., Walldén, Y. S. E. & Rees, G. (2019). A Neuroanatomical Substrate Linking Perceptual Stability to Cognitive Rigidity in Autism. *Journal of Neuroscience*, 39, 6540-6554. <https://doi.org/10.1523/JNEUROSCI.2831-18.2019>

## **Verifying Verbal Behavior Detection Theory: Cognitive Processes for Distinguishing between Sincerity, Lie, Sarcasm and Joke**

TAKIZAWA Jun

This study aimed to test theories on the distinction between verbal behaviors such as sincerity, lies, sarcasm, and jokes. In Study 1, 25 verbal behavior labels were selected by reviewing previous research and a thesaurus survey. In Study 2, 93 students were surveyed; the number of people was counted for the verbal behaviors that corresponded to each of the nine types of utterance/speaker evaluation, and the verbal behaviors were classified using cluster analysis. The results showed that the verbal behaviors were generally distinguishable according to the following seven evaluations: the literal meaning of the utterance, the sense of discomfort from the speaker's voice, whether the speaker is trying to hide his/her feelings, whether the speaker is not trying to hide his/her feelings, whether the speaker has cognitive errors, whether the speaker is trying to make the other person laugh, and whether the speaker is trying to hurt the other person. The commonalities and differences between the linguistic behaviors were organized, and Verbal Behavior Detection Theory was proposed. The originality, applicability, and social significance of this study were discussed.